

## W-3-4 南琉球八重山語における三型アクセント体系のさらなる報告

セリック・ケナン（国立国語研究所） 麻生玲子（名桜大学）

1. はじめに 南琉球諸方言のアクセント体系を正しく記述するためには、本土や北琉球諸方言とは異なる理論的枠組みとそれに基づいた調査法が必要であることが解明されつつある（松森 2015、2016、五十嵐 2016 など）。しかし、現在もなおこの新しい理論的枠組みと調査法が適用されていない方言が残っており、それらの方言のアクセント体系は正しく記述されていない可能性が残る。

本発表では以上の点を踏まえ、二型のアクセント体系を持つとされてきた八重山語の4つの方言（大浜、宮良、石垣四箇、西表古見）を取り上げ、これらの方言では、①3つのアクセント型が区別されており、②「韻律語」という韻律単位（五十嵐 2015、2016）が機能している体系であるという2点を明らかにする。その過程で対象方言のアクセント体系について新しい音韻的解釈を提示し、琉球祖語で再建される系列との通時的な関係について簡単に指摘する。

2. 背景 南琉球八重山語に属する石垣（四箇）、大浜、宮良、古見の諸方言は2つのアクセント型が区別される二型のアクセント体系を持つとされてきた（秋永 1960、平山・他 1967、セリック・他 2022、セリック・麻生 2023）。具体的に言うと、語頭辺り（1拍あるいは2拍の直後）に「下がり目」が指定されている「下降型」と、無指定の「平板型」が区別されるという（平山・他 1967）。現代の宮良方言の例を(1)に挙げる（以下の例において「[ ]」と「 ] 」がピッチの局所的な上昇と下降を示し、「 = 」が接語境界、「 + 」が複合語境界を表す。平らな音調に対してはピッチ記号を付さない）。

(1) 宮良方言におけるアクセント型の区別（セリック・他（2022: 162）より）

- a. 下降型： mai]=nu ... 「米の...」、idzu]=nu ... 「魚の...」、pitu]=nu ... 「人の...」、matsi]ri]=nu ... 「祭りの...」
- b. 平板型： ki:=nu ... 「木の...」、jadu:=nu ... 「戸の...」、kaṭa:=nu ... 「肩の...」、nasabi:=nu ... 「茄子の...」

これに対し、古見方言（松森 2015）と宮良方言（荻野 2022）では、複合語で3通りの音調が観察されており、3種類のアクセント型が区別されている可能性について指摘されている(2)。しかし、根拠となるデータが複合語に限られているため、3つの型が区別されているかどうかを検討するにあたり、単純名詞に焦点を当てた検証が必要であるという点が問題として残る。

(2)	古見方言		宮良方言	
a 型	mjaa]ku+p̄itu	「宮古の人」	mee]gu+muni	「宮古言葉語」
b 型	jamatu+p̄itu	「大和の人」	jamadu+muni	「大和言葉」
c 型	patuma]+p̄itu	「鳩間の人」	hatuma+mu]ni	「鳩間言葉」

松森（2015: 76）・荻野（2022: 481）より抜粋、表記を一部改変

さらに、松森（2015）は、古見方言の韻律階層は宮古語諸方言と同様に、モーラより上位で文節より下位の「韻律語」（prosodic word、以下 pw）という韻律単位（五十嵐 2015、2016）を持つとし、この韻律語に基づき、各アクセント型の音韻的解釈を提示している(3)。

(3) 古見方言のアクセント型の解釈 (松森 2015: 77)

〈a 型〉最初の PW の 2 つ目のモーラ (2 つ目のモーラがなければ 1 つ目) に【下降が】出現

〈b 型〉アクセントがない

〈c 型〉最初の PW の最後のモーラに【下降が】出現

しかし、古見方言について韻律語を想定すべきかどうかについても、さらなる検証が必要であろう。「韻律語」の形成ルールは「2 モーラ以上の語根・接語の左端に韻律語境界を挿入せよ」(五十嵐 2016: 38) のように定義されてきた。それに従うなら、韻律語を持つ体系において、①単純名詞に 1 拍接語が後続する文節と、2 拍以上の接語が後続する文節とで韻律的構造が異なり、それによってアクセントの実現パターンも異なりうるという点と、②単純名詞に 2 拍以上の接語が後続する文節が、2 つの構成要素から成る複合語の単独発話、あるいは 1 拍接語が後続する文節と同じ韻律的構造を持ち、アクセントの実現パターンも一致する、という 2 点の予測が成立する。ある体系において韻律語が機能しているかどうかを検討する際には、この 2 点を確認すべく、対象語を様々な助詞と組み合わせたうえで、音調を詳細に調べ検証する必要がある。

3. 大浜方言 環境別における地名名詞の実現を(4)に示す (昭和 14 年生男性)。

(4)		a 型・「宮良」	b 型・「大和」	c 型・「多良間」
X=du ...	「X ぞ...」	mjaa]ra=du ...	jamatu=du ...	tarama=du ...
X=ja ...	「X は...」	mjaa]ra=a ...	jamato=o ...	tarama=a ...
X=ke=du ...	「X へぞ...」	mjaa]ra=ke=du ...	jamatu=ke=du ...	tarama]=ke=du ...
X=kara=du ...	「X からぞ...」	mjaa]ra=kara=du ...	jamatu=kara=du ...	tarama]=kara=du ...
X+muni=du/n ...	「X+言葉ぞ／も...」	mjaa]ra+muni=du ...	jamatu+muni=n ...	tarama]+muni=n ...

=ke 「～へ」、=kara 「～から」や複合語の環境において 3 種類の音調が観察される。(4)に提示した語の音節構造は揃っていないが、tunaru 「隣」は mja:ra 「宮良」と実現が同じ (tuna]ru=kara=du ... 「隣からぞ...」など) ため、3 種類のアクセント型が区別されていると言える。

a 型はどの環境においても音調が一貫しており、語頭より第 2 拍の直後にピッチの下降が実現する。b 型はどの環境においても音調が一貫しており、平たく発音される。c 型は環境により、実現が異なる。1 拍接語の=du 「～ぞ」や=ja 「～は」が後続する環境では b 型と同じく平たく発音され、その場合、b 型と中和する。これに対して、=ke 「～へ」、=kara 「～から」や複合語の環境においては、形態素境界にピッチの下降が実現する。

3 拍名詞に見られる 3 種の音調は 2 拍名詞にも確認できるため、3 種のアクセント型が区別されることが支持される(5)。注: 「昨日」は八重山の多くの方言で A 系列に対応している (ローレンス 2020)。

(5)		a 型・「昨日」	b 型・「去年」	c 型・「今」
X=ja ...	「X は...」	kinu]=ja ...	kudzu]=ja ...	nama]=a ...
X=kara ...	「X から...」	kinu]=kara ...	kudzu]=kara=du ...	nan]=kara ...

ただし、全体として b 型の単純名詞は限られているようである。これまで確認できた b 型の単純名詞を(6)に示すが、他方言との対応関係からして b 型での実現が期待される suma「島」、jama「山」、hama「浜」などは全て c 型で実現している。

(6) 大浜方言における b 型名詞 : jaa「家」、taa「田んぼ」、kjuu「今日」、kudzu「去年」、atsa「明日」、en「来年」、jamatu「本土」

上記より、大浜方言の韻律構造について、2 節の①と②が成立していることが確認できる。=ke「～へ」に関しては、=kai と自由に交代していることから=ke が本来 2 拍の接語であり、=kara と同じ振舞いを示し、1 拍接語の=du「～ぞ」、=ja「～は」とは異なると考える。さらに、複合語は、単純名詞に=ke や=kara が後続する環境と同じ実現を示すことから、この 2 つの環境は同じ韻律構造を持つと解釈できる。つまり、韻律語が機能する韻律構造を想定することが妥当である(7) (韻律語の境界を「( )」で示す)。b 型は提示した全ての環境において平板の音調で実現し、c 型は第 1 韻律語の末尾拍の直後にピッチの下降が実現する。ただし、韻律語が 1 つだけ形成される環境では、c 型の下降が実現せず、その結果、b 型と c 型が中和する。

(7)		a 型・「宮良」	b 型・「大和」	c 型・「多良間」
1pw	(X=du)	「X ぞ」	(mjaa]ra=du)	(jamatu=du) (tarama=du)...
	(X=ja)	「X は」	(mjaa]ra=a)	(jamato=o) (tarama=a)
	(X)=(ke=du)	「X へぞ」	(mjaa]ra)=(ke=du)	(jamatu)=(ke=du) (tarama])=(ke=du)
2pw	(X)=(kara=du)	「X からぞ」	(mjaa]ra)=(kara=du)	(jamatu)=(kara=du) (tarama])=(kara=du)
	(X)+(muni=du/n)	「X+言葉ぞ／も」	(mjaa]ra)+(muni=du)	(jamatu)+(muni=n) (tarama])+(muni=n)

(7)に挙げた例では全ての環境において平板の音調で実現する b 型だが、複合語に韻律語を形成する接語が後続する場合には、(joi)+(jaa])=(ke) ... 「お祝いのある家へ...」のように第 2 韻律語の末尾拍の直後にピッチの下降が実現する。このことから、b 型も下降が指定されていると考える必要がある。すなわち、b 型は無指定の型ではなく c 型と下降の位置 (第 2 対 第 1) で対立していると捉える方が妥当である。まとめとして大浜方言のアクセント体系の音韻的解釈を(8)に示す。なお、位置による対立は b と c 型に限るため、a 型を無指定の型として分析することも可能であろう。

(8) 大浜のアクセント体系 :  
 a 型 語頭より第 2 拍の直後に下降が指定されている  
 b 型 第 2 韻律語の直後に下降が指定されている  
 c 型 第 1 韻律語の直後に下降が指定されている

4. 宮良方言 宮良方言は、大浜方言と同様の結果が得られた(9) (昭和 21 年生男性)。各アクセント型の実現が大浜と同じなので、議論を繰り返さないが、(9)のデータより、宮良方言は、3 種のアクセント型が区別されることと、韻律語が機能していることが確認できる。結果として、各アクセント型の音韻的解釈は大浜と同じものを想定できる(10)。

(9)		a 型・「宮古」	b 型・「沖縄」	c 型・「多良間」
X ...	「X ...」	mee]gu ...	ukinaa ...	tarama ...
X=gee ...	「X へぞ...」	mee]gu=gee	ukinaa=gee ...	tarama]=gee ...
X=gara ...	「X からぞ...」	mee]gu=gara	ukinaa=gara ...	tarama]=gara ...
X+muni=ja ...	「X+言葉は...」	mee]gu+muni=ja ...	ukinaa+muni=ja ...	tarama]+muni=ja ...
X+muni=gara ...	「X+言葉から...」	mee]gu+muni=gara ...	ukinaa+muni]=gara ...	tarama]+muni=gara ...

- (10) 宮良のアクセント体系：  
 a 型 語頭より第 2 拍の直後に下降が指定されている  
 b 型 第 2 韻律語の直後に下降が指定されている  
 c 型 第 1 韻律語の直後に下降が指定されている

大浜方言と同様に、b 型に分類できる単純名詞は限られている。さらに、限られた b 型の単純名詞が、c 型の音調で実現することもある(11)。他方言との対応関係から b 型が期待される一部の語は、一貫して c 型で実現する (kii, kii]=gara 「木、木から」、mami, mami]=gara 「豆、豆から」、aba, aba]=gara 「油、油から」等)。つまり、これらの語は「本来」の c 型の語 (nabi, nabi]=gara 「鍋、鍋から」、funi, funi]=gara 「船、船から」等) とははや区別できなくなっている。

- (11) a) 一貫して b 型で実現する語 : kjuu 「今日」、attsa 「明日」、jaa 「家」、ukinaa 「沖縄」  
 b) b 型でも c 型でも実現する語 : jama 「山」、sima 「島」、jamadu 「大和」

その一方、複合語では、b 型と c 型の区別が単純名詞より明確である(12)。特に、b 型が期待される単純名詞が c 型で実現していても、それを前部要素を含む複合語は一貫して b 型で実現し、本来の c 型語を前部要素を含む複合語と対立する例が多く見つかる (「油」対「オニオコゼ」など)。

- (12) a) b 型 : aba+nabi 「油鍋」、gaja+jaa 「茅葺き」、joi+jaa 「祝いのある家」、panari+dzima 「離島」 ...  
 b) c 型 : aba]+idzu 「オニオコゼ」、atu]+tudzu 「後妻」、ujagi]+jaa 「金持ち」、kaara]+jaa 「瓦葺き」 ...

5. 石垣方言 石垣四箇方言に関しては、平山・他 (1967) によって、下がり目が指定されている下降型と無指定の平板型が区別されると報告されて以来、アクセント体系を対象とした記述研究は管見の限り見当たらない。幸いなことに、『石垣方言辞典』(宮城 2003) にピッチの上昇と下降位置を記した例文が豊富に収録されているため、これらの例文を以て石垣方言のアクセント体系をより詳しく分析することが可能である。以下では、対立が明瞭で、実現が一貫している下降型を取り扱わず、「平板型」とされた語のみを分析対象とする。また、語形を提示する際、抽出例文の項目とページのみを示す。

環境ごとに単独発話に基づいて平板型に分類される単純名詞を調べると、1 拍接語 (=ja 「～は」、=ba 「～を」...) が後続する環境では全て平板で実現するのにも関わらず、大浜や宮良と同様に、=kai 「～へ」や=kara 「～から」の接語が後続する環境では、語によって 2 種類の音調が実現することが確認できる。すなわち、文節全体が平板に発音される音調(13)と、語根と接語の形態素境界にピッチの下降が実現する音調(14)が観察される。ミニマルペア (jama 「山」対 jama 「畏」) も見つかる。

- (13) a) [ja:kai ... 「家へ」(カ<sup>1</sup>イ・197)、[haikai ... 「南へ」(シ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ーン・1215)、  
[jamakai .. 「山へ」(ピ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ト<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ム<sup>1</sup>ド<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>シ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>・868)、 $\phi$ y[kakai ... 「外へ」(ウ<sup>1</sup>イ<sup>1</sup>ダ<sup>1</sup>シ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・122)  
ʔat[tsakai] ... 「明日へ」(カ<sup>1</sup>イ<sup>1</sup>・197)、ja[kadakai ... 「脇へ」(ヤ<sup>1</sup>カ<sup>1</sup>ダ<sup>1</sup>・1132)
- b) [ja:kara ... 「家から」(タ<sup>1</sup>ユ<sup>1</sup>リ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ッ<sup>1</sup>サ<sup>1</sup>ーン<sup>1</sup>・526)  
[jamakara ... 「山から」(ド<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup> ヤ<sup>1</sup>マ<sup>1</sup>シ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・633)、 $\phi$ y[kakara ... 「外から」(パ<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>シ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>リ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>・825)  
[ʔattsakara ... 「明日から」(テ<sup>1</sup>ィ<sup>1</sup>ー<sup>1</sup> チ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>キ<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・604)
- (14) a) [ki:]kai ... 「木へ」(ア<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ー<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・26)、[mai]kai ... 「前へ」(ユ<sup>1</sup>ツ<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・178)、  
ja[ma]kaim ... 「巽へも」(カ<sup>1</sup>カ<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・203)、[ʔuni]kai ... 「船へ」(ヌ<sup>1</sup>シ<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・734)、  
[para:]kai ... (ム<sup>1</sup>ツ<sup>1</sup>ア<sup>1</sup>リ<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>1094)、ʔu[kīna:]kai ... 「沖繩へ」(ヤ<sup>1</sup>ーム<sup>1</sup>チ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ナ<sup>1</sup>リ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>・1129)
- b) [ki:]kara ... 「木から」(ド<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup> シ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ト<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>ナ<sup>1</sup>イ<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・628)、  
[mai]kara ... 「前から」(イ<sup>1</sup>チ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>バ<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>ミ<sup>1</sup>ー<sup>1</sup>・96)、[ʔuni]kara ... 「船から」(カ<sup>1</sup>ラ<sup>1</sup>・248)、  
[ʔukīna:]kara ... 「沖繩から」(ク<sup>1</sup>ダ<sup>1</sup>ル<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>・318)

以上のデータより、従来「平板型」とされてきたものには対立する2つのアクセント型が混在することが分かる。つまり、単独発話や1拍助詞が後続した文節は中和環境に過ぎず、2拍以上の接語が後続する環境では、平板と、形態素境界下降（それぞれb型とc型と呼ぶ）という2種のアクセント型が対立している。大浜方言や宮良方言に比べb型の分布が広いようだが、b型が期待されるにもかかわらず、専らc型の音調で実現する語（munu「物」、kan「神」、kīn「着物」等）も同様に多く見つかる。また、b型で実現する語のうち、例文によってc型で実現する語も見つかる（jama「山」、suba「側」等）。

複合語でもb型とc型の明瞭な対立が確認できる(15)。さらに、b型が「平板」ではないことも確認できる(16)。従って、石垣方言のアクセント体系について(8)(10)と同じ音韻的解釈を採用できる。

- (15) a) b型：kə[tabuni「鎖骨」、[gajaja:「茅葺き」、[joija:「祝いのある家」、[hamaja:「浜小屋」、  
[ka:raja:「瓦を焼く家」、[hatagija:「畑小屋」、[bagarija:「分家」、[mifukami「味噌瓶」
- b) c型：[pira]buni「肩甲骨」、[du:]buni「骨格」、[ʃira]ja:「産褥中の家」、[ʔatu]ja:「法事をする家」、  
[dzo:]ja:「屋根の付いた門」、[ʔujaki]ja:「金持ち」、[ka:ra]ja:「瓦葺き」、sɿ[tadi]kami「醤油瓶」
- (16) [joija:]kaija「祝いのある家へは」(ムー<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>チ<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>・1086)、[dʒingutu]kara「金銭の件から」(ジ<sup>1</sup>ン<sup>1</sup>グ<sup>1</sup>ト<sup>1</sup>ウ<sup>1</sup>・466)

6. 古見方言 古見方言のアクセント体系は、これまで見てきた方言より実現がやや複雑であるが、アクセント型の対立数や韻律構造について同様の結果が得られた（昭和10年生女性）。単純名詞の実現を(17)に示す（「%」は小幅の上昇を表す）。

(17)	a型・「井戸」	a型・「肘」	b型・「家」	b型・「山」	c型・「田」	c型・「喉」
X=n(u)=du ...	[kaa]=nu=du	-	jaa=n=%du	jama=nu=%du	taa=nu=%du	nudu=nu=%du
X=ja ...	[ka]a=ja	[midzi]=ja	jaa=[ja	jama=[ja	taa=[ja	nudu=[ja
X=kara ...	[kaa]=kara	[midzi]=kara	jaa=[ka%ra	jama=[kara	[taa]=kara	nu[du]=kara

1拍接語の連続=nu=duが後続する環境では、2種類の音調、すなわち、語頭（1拍目や2拍目の直後）

に大幅なピッチの下降が実現するパターンと、文節全体がほぼ平板に発音されるパターンが観察される。1 拍接語である主題助詞=ja が後続する環境でも同様に、下降パターンと、助詞のみが高く発音される上昇のパターンが観察される。しかし、2 拍接語=kara が後続する環境では 3 種類の音調が区別される。1 つ目は下降のパターンである。2 つ目は接語が高く発音される上昇のパターンである。3 つ目は語根の末尾音節が高く発音される上昇下降のパターンである。なお、CVV の音節構造を持つ a 型と c 型の名詞はこの環境において中和しているが、他の環境の実現からして音韻的に対立していることが確かめられる。これらの観察から、単純名詞は 3 つのアクセント型が区別されると言える。この結果は、複合語でも同様に 3 種のアクセント型が対立することが確認できることによって支持される(18)。なお、松森 (2015: 77) では古見方言の b 型を「アクセントがない」と解釈しているが、筆者らが得たデータからは位置による対立が観察された。

(18) a 型 : [mija]ra+muni=kara ... 「宮良方言から...」、b 型 : jama[tu+muni]=kara ... 「本土方言から...」  
c 型 : ta[rama]+muni=kara ... 「多良間方言から...」

古見方言の韻律構造についても 2 節で挙げた①と②が成立しているため、韻律語が機能していると結論できる。すなわち、=nu 「～の」、=na 「～に」は=ja 「～は」と同じ振る舞いを見せ、=ngai 「～へ」、=made 「～まで」は=kara 「～から」と同じ振る舞いを見せている。さらに、単純名詞に 2 拍接語が後続する文節と複合語を含む文節とで、アクセント型の実現が一致している。さらに、c 型の[taa]=kara 「田から」や他の mi:[dun]kara 「女性から」などの実現より、アクセント型の指定が「拍」ではなく、「音節」であることが分かる。b 型と c 型の上昇パターン(上昇タイミング、語頭分節音の有声性との相関など)についてさらなる検証が必要であるが、これまでの議論をまとめ、古見方言のアクセント体系の暫定版を(19)に提示する。位置による対立は b 型と c 型に限られるため、他の方言と同様に a 型を無指定の型として分析することも可能である。

(19) 古見のアクセント体系 : a 型 語頭より第二拍の直後に下降が指定されている  
b 型 第二韻律語の末尾音節が高い  
c 型 第一韻律語の末尾音節が高い

これまで見てきた他の方言と同じく、古見方言でも単純名詞において b 型に分類される語が少ない(他には kjuu 「今日」、atsa 「明日」がある)。b 型と期待される mma 「馬」、mun 「麦」、mami 「豆」、amba 「油」、mussu 「筵」などは全て c 型で実現しており、単純名詞は b 型の c 型への合流が相当進んでいると考えられる。

参考文献：秋永一枝 (1960) 「八重山方言一・二音節名詞のアクセントの傾向」『国語学』41: 121-125 / 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』8: 1-42 / 五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33-57 / 荻野千砂子 (2022) 「沖縄県石垣市宮良」セリック・ケナン、木部伸子、五十嵐陽介、青井隼人、大島一 (編) 『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』473-536 / セリック・ケナン、麻生玲子 (2023) 「南琉球八重山語大浜方言のアクセント資料」『言語記述論集』15: 171-192 / セリック・ケナン、麻生玲子、中澤光平 (2022) 「南琉球八重山語宮良方言の名詞アクセント資料」『国立国語研究所論集』22: 157-176 / 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院 / 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系：その韻律単位に関する考察」『日本女子大学 紀要 文学部』64: 55-92 / 松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み：その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件」『言語研究』150: 59-85 / 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』沖縄タイムス社、沖縄 / ローレンス、ウエイン 2020 「アクセント変化から見た琉球方言の系統樹と日本語音調から見た琉球祖語音調」シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」発表資料 謝辞 22KF0370、21H00353、20H01259、NINJALPJ 「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」(五十嵐陽介)、「消滅危機言語の保存研究」(代表：山田真寛)。